水曜通信 13

2018年
6月

東北学院大学研究ブランディング事業通信
「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」

第13回水曜礼拝（公開大学礼拝）
2018年 6 月20日（水） 18:30-19:00

奨励：鐸木 道剛（本学教授）
奏楽：小野 なおみ（本学礼拝オルガニスト）

＜礼拝次第＞

前　奏：D.ウッド「夜の歌（Song in the Night)」
讃美歌：４番「よろずのくにびと」
聖　書：詩編135編15～18節
讃美歌：429番「あいのみかみよ」
奨　励：「魔術からの解放」
祈　祷
頌　栄：540番「みめぐみあふるる」
後　奏：「日暮れて四方は暗く」

後奏の後、30分間、東北学院大学宗教部聖歌隊の合唱による讃美を行ないます。

次回第14回水曜礼拝は**7月18日**です。

第12回水曜礼拝報告（説教：川島 堅二、奏楽：小野 なおみ）

2018年５月16日（水）18：30－19：00

讃美歌：40番「きょうのひとひも」
聖　書：マルコによる福音書１章１６～20節
讃美歌：124番「みくにをもみくらをも」
説　教：「生きがいと死にがい」
頌　栄：541番「ちちみこみたまの」

【説教要旨】

イエス・キリストの12人の弟子として後世に名を残すことになるシモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネたち、彼らは漁師であったが、「父」と「網」を捨ててイエスに従った。「父」は彼らの過去のすべてである。また将来受け継ぐ土地や財産も「父」から相続されたので、彼らの未来であるともいえる。「網」は彼らの現在を支えるもの。したがって、彼らは過去・現在・未来のすべてを捨ててイエスに従ったことになる。なぜそのようなことができたのか。

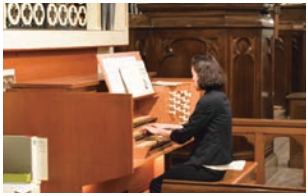
それはイエスの呼びかけにいのちをかける覚悟を感じ取ったからだ。日本昔話の「桃太郎」で、犬猿雉は桃太郎の「お腰につけたきびだんご」とひきかえに「鬼退治」という命がけのミッションに参加する。「腰」は神話学的には「生殖力」「生殖器」をあらわす。みずからの「命の元」を差し出す桃太郎に、犬猿雉は応えた。イエスの弟子たちも同じだ。死に至るまで弟子たちを愛するイエスに、彼らはすべてをささげて応えたのだ。「死にがい」は最大の「生きがい」でもあるという逆説的ないのちの不思議をここにみる。

（川島堅二）

― 桃太郎の神学 ―

数年来、私はアジア的コンテキスト（脈絡）におけるキリストの福音の解釈学を構想している。古くは「福音の土着化」などと言われたが、これは解釈学の課題である。キリスト教の基本教理は紀元５世紀までにほぼ形が出来上がるが、それさえ、当時のギリシャローマ世界のコンテキストで解釈された「福音」である。その一端をこの説教で紹介した。（川島堅二）

前　奏：J.S.バッハ「我ら悩みの極みにありて」（BWV668）
後　奏：E. シュット「夕べの静けさ」



晩年のバッハは視力をどんどん失い、最晩年には殆ど見えなくなっていました。バッハはすがる思いで手術を受けたのですが、結局完全に視力を失ってしまいました。その後、死の床で自分が筆を持てない代わりに口述筆記させたと伝えられているのが、「我ら悩みの極みにありて」です。神さまの元に安らかに歩みを進めるような、慰めに満ちた曲です。（小野なおみ）

※礼拝とその後の19時00分から20分までの中川郁太郎の独唱による讃美に40名の市民が参加されました。

礼拝後、中川郁太郎（本学特任准教授）の独唱による讃美

今年度も水曜礼拝が守られ、讃美の時を持てますことを感謝いたします。今月は「夕暮れ」にまつわる歌を中心に集めました。夜の闇が訪れるまでのつかの間のひと時である「夕暮れ」。鴎外の「舞姫」における運命的な出会い（舞台は帝政ドイツ時代のベルリン）を想い起こすまでもなく、わが国の文学作品において常に印象的に取り上げられてきた「夕暮れ」は、古来、キリスト教会においても特別な時間とされてきました。

最初の曲は、10世紀頃のスペインを発祥とするモサラベ聖歌の中の夕暮れ時の祈り＝晩祷の歌詞に、20世紀の作曲家デイヴィッド・ハードがあらたに曲をつけた《キリストよ、光の主よ》（讃美歌21－222番）です。夕暮れの中に、来たるべき夜の闇からの庇護を神に願い、その先にある「新しい朝」を待ち望む、教会が1000年以上に亘って受け継いできた祈りの歌です。続いてバッハ＝シェメッリの宗教的歌曲から、来たるペンテコステを覚えて《今日こそ来たれ、魂よ》を讃美し、３曲目は、バッハを大変尊敬していた19世紀の作曲家メンデルスゾーン＝バルトルディの《エリヤ》から、主人公である預言者エリヤの歌を取り上げます。故国北イスラエルの黄昏の時に立ち上がった預言者エリヤの祈り、この後に与えられる炎の奇蹟、降雨の奇蹟もまた、夕暮れ時の出来事であったのでしょうか。４曲目は再びバッハ＝シェメッリの歌曲に戻り、人生の夕暮れ、すなわち死への想いを歌った《来たれ、甘き死よ》を歌います。バッハは煙草をふかしている時ですら人生の儚さや死の不可避について思いを馳せる人でしたが、この曲も「死」や「埋葬」をあらわす下降旋律にみたされた美しい歌となっています。最後の曲、シューベルトの《夕映えの中に》は、作曲家山田耕筰や詩人尾崎喜八にも影響を与えたドイツ・リートの名曲ですが、本来宗教曲とは言えません。しかし詩人カール・ラッペが「夕映え」に寄せた宗教的な感動を、シューベルトはこの世のものとも思えない美しい音楽で表現しています。「この胸が破れ果てるまで、光と炎とを吸い続けるのだ」という最後の歌詞には、31歳にして生命を奪われたシューベルトの音楽に絶えずつきまとう「死の影」が表れていますが、それすらもここでは、神の創った「夕映え」の中に溶け込んでいく…「夕映え」と一体化してしまうかのような恍惚感のある音楽です。

シューベルトを契機として創出されたドイツ・オーストリアの芸術歌曲、ドイツ・リートは「声楽曲のオリンピア」と語る人もいるほど、詩と音楽（歌だけではなくピアノ声部も含めた）との密接な関係性によって成り立つ精巧な芸術作品です。今回そのドイツ・リートを「オルガンと共に演奏する」という人生初の試みをさせていただきましたが、私の細部に拘ったしつこいリハーサルに辛抱強くつき合ってくださり、本番では歌に勝る陶酔的で美しい「夕映え」の世界を美しい音色で奏でてくださった、本学オルガニストの小野なおみ先生にとくに感謝を捧げたいと思います。

（中川郁太郎）

― 夜、外からみるラーハウザー記念東北学院礼拝堂のステンドグラス ―

水曜礼拝は夕方６時半からの夕べの礼拝です。修復されて、ステンドグラスは礼拝堂のなかの明かりを通して、外からもよく見えるようになりました。イエス・キリストは「私は世の光」で、「闇はそれ（光）に勝たなかった」と聖書にいいます。更けゆく夕暮れのなかで光るステンドグラスはまさに福音の体現です。水曜礼拝のあと、後ろに回られて、礼拝堂をご覧になってください。キリストと聖霊の鳩が輝いています。　（鐸木道剛）

協賛講演会のお知らせ
「ユニテリアンが与えた影響とその意義」

講　師：土屋博政
（慶應大学名誉教授・瀬谷独立イエス・キリスト教会牧師）
日　時：６月30日（土）13：30－15：30
場　所：土樋キャンパス８号館５階　押川記念ホール

三位一体説に異を唱えるユニテリアンのキリスト教信仰は、初期の慶応大学を始め、日本近代に大きな影響を与えました。パウロのいう躓きとしての、テルトゥリアヌスのいう不合理としての超越のキリスト教の土着化を考えます。

研究ブランディング事業公開講演会のお知らせ
「今日のキリスト教信仰：アメリカ合衆国の「宗教市場」のなかで」
Christian Faith Today in the “Religious Market Office” of the United States

講　師：キャロル・リッチ（Carol Lytch ランカスター神学校校長）
日　時：７月19日（木）13：00－14：30
会　場：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール

ランカスター神学校は東北学院を創立した三校祖のうちのホーイ師とシュネーダー師の母校です。ランカスター神学校のリッチ校長が今日のアメリカの宗教事情について解説されます。英語での講演ですが、ジェフリー・メンセンディーク（Jeffre Mensendiek 桜美林大学准教授）の通訳がつきます。

文部科学省私立大学研究ブランディング事業とは：
学長のリーダーシップの下、大学の特徴ある研究を基盤として、全学的な独自色を大きく打ち出す取り組みを行う私立大学に対し、施設費・装置費・設備費と経常費を一体的に支援するもので、各大学の特色化・機能強化の促進を目的としています。東北学院大学は、「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」との事業名で平成28年11月22日に採択されました。

東北学院大学研究ブランディング事業通信
第13号
2018年6月10日発行
〒980-8511　仙台市青葉区土樋1-3-1
TEL：022-264-6547
E-mail：branding@mail.tohoku-gakuin.ac.jp
URL：http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/theology/